

夢を持ち、自ら生きる力を育む 「龍の子人づくり」への挑戦

地域の
特色ある
活動

茨城県龍ヶ崎市教育委員会

1 はじめに

龍ヶ崎市は茨城県の南部、都心（東京駅）の北東約45kmに位置しております。市の北部は関東ロームが堆積する台地で都市化が進んでおり、南部は利根川と小貝川に挟まれた沖積平野で豊かな田園地帯が広がっております。また、市の北西部には白鳥が集う牛久沼があり、本市を象徴する場所になっております。

人口は約77,000人ですが、学校数は小学校11校、中学校6校、高等学校は公立高校が3校、私立高校が1校、そして、近年スポーツ界において日本を代表するアスリートを数多く輩出している流通経済大学があります。また、元横綱の稀勢の里関（現荒磯親方）が小中学校時代まで過ごした場所で、スポーツ環境が充実している都市でもあり、「スポーツ健幸日本一」を市政のスローガンの一つに掲げております。

しかしながら、全国的な傾向である少子・高齢化問題は本市においても顕著な課題になっており、さらには、近年の異常気象等や環境問題、また、過去における小貝川決壊を教訓とした防災・減災への対応は本市における重要な課題かつ施策であると言えます。

このように課題が山積している中、本市の最上位計画「ふるさと龍ヶ崎戦略プラン」において、将来都市像「目指していくまちの姿」として「人が元気 まちも元気 自慢したくなるふるさと 龍ヶ崎」を掲げております。教育委員会においても、本プランの具体化に向けて取組を行っているところであります。

そこで、本市教育委員会では、激しく変化する社会の中においても、一人ひとりが夢や

希望を育み、生きる力を自ら身に付けられるような人間の育成を目指すために、「龍の子人づくり学習」を核とした小中一貫教育を推進することとしました。

2 こんな時代だからこそ「人づくり」への挑戦

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、首都圏の通勤通学者の割合が極めて高い本市では、当初より強い危機感を持って対応してきました。JR常磐線沿線にあることから常に感染拡大の状況を注視しながらの教育活動にならざるを得ませんでした。

特に、「人づくり」を進めていく上では、人との関わりの中での学びが不可欠な要素であり、「3密回避」の要件によって、目指す活動や学習が困難であった状況もありました。しかし、これまでの生活や学習習慣から離れて、新しいスタイルと考え方の形成によって、予想以上の成果を生み出してきた活動も多々あることが分かりました。

入学間もない新入生であっても、制限された中での学校生活の一年間で、現在は当たり前のようにマスク着用、黙食、手洗い消毒ができるようになっております。この緊迫感のある社会の中で生きる力を低学年なりに着実に身に付けてきたという感があります。また、コロナ禍における危惧の一つに「誹謗中傷」「いじめ行為」等も考えられました。当事者の気持ちになっての言動の在り方を考える等、まさに「人づくり」の一環となった一年であったと言えます。今更ではありますが、体験を通じた学びとその積み重ねの有効性を再認識した次第であります。

3 「龍の子人づくり学習」を核とした小中一貫教育の推進

「龍の子人づくり学習」は、「生きる力」を基盤とした社会参画力の育成のための学習としております。義務教育9年間で大きなまとまりとして、系統性や連続性を確保してなめらかな成長を促すこととしております。そのために9年間の各発達段階に応じて重点化すべき学習のねらいを明確にし、社会参画力の育成につながる特色ある学習を展開していくものであります。

(1) 社会的・職業的な自立を促す「ゆめ学習」(キャリア教育)

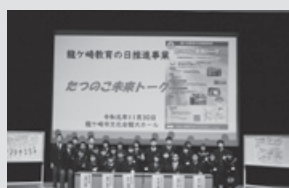
学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させることで、意欲を向上させ、望ましい勤労観・職業観を育て、社会的・職業的な自立を促すものであります。「関わる力」「みつめる力」「解決する力」「生き抜く力」の4つの力を育てていくものとしております。

体験をして終了といった事例がほとんどであるという反省の下、体験後の個々の振り返り、教師による評価と支援が重要であると考えました。自立のための学習手段であればこそ、9年間の積み重ねを大切にしていこうとするものであります。



(2) よりよい社会人としての資質・能力を育成する「みらい学習」(シティズンシップ教育)

よりよい社会の実現のために必要な、市民としての資質・能力を育てるものであります。意識・知識はもとより、習得させたいスキルは、自分の意思を表現する力(プレゼンテーション力、ディスカッション力)、他人の意見を聞く力(ヒアリング力)、意思決定する力(マネジメント力)、実行する力(リーダーシップ、フォロワーシップ等)を学年の発達段階に応じて体験学習・活動を通して習得し、積み上げていくようにしています。



(3) 6つの中学校区単位での独自のカリキュラム作成

本市は歴史と伝統のある商業市街地区、首都圏のベットタウン的なニュータウン地区、稲作や野菜づくりの盛んな農業地区等があり、冒頭で述べた「ふるさと龍ヶ崎戦略プラン」では、今後のまちづくりを4つの地域を単位として進めていくという方向性が示されています。地域行事、施設、交通手段、まちづくりの歴史等の違いや特徴がそれぞれの地域にあり、生活圏も異なることから、中学校区単位の小中学校でカリキュラムを作成することとしました。基本方針や目指す子供像は市として統一したものにし、実践のための計画や方法については各中学校区に委ね、必要に応じて横断的な連携を取れるような体制を整えました。

このことにより、地域社会からの関心が高くなり、人的な支援も今まで以上に得られるようになってきました。将来的には地域の活動に参加する人間から、地域に貢献しようとする人材への発展も期待できるものと考えております。



4 おわりに

現在、様々な教育施策が前倒しで実施されるようになり、その慌ただしさを実感している今日この頃です。GIGA スクール構想、新学習指導要領への移行等、課題が山積する中、将来、社会人として自信を持って生きていく人間の育成はいつの時代でも変わらない普遍の命題であります。本市の地道で着実な取組によって、規範意識の低下、自尊感情や自己肯定感の欠如といった現代社会における児童生徒の課題の解消に迫っていくことができます。ものと考えております。



教育長
平塚 和宏